

各 位

唐津農林事務所東松浦農業振興センター長

稲作情報第3号

1. 気象概要（アメダス：唐津地点）

月	半旬	平均気温 (℃)		最高気温 (℃)		最低気温 (℃)		降水量 (mm)		日照時間 (h)	
		平年	R8	平年	R8	平年	R8	平年	R8	平年	R8
6	4	22.4	24.6	26.1	29.2	19.6	21.4	54.5	26.0	20.6	11.4
	5	23.0	21.9	26.6	24.4	20.4	20.4	65.1	217.5	17.8	6.1
	6	23.9	22.0	27.3	26.2	21.3	19.3	73.6	63.5	14.8	25.9
7	1	24.7	23.9	28.0	27.6	22.2	21.2	87.3	252.5	15.2	9.5
	2	25.3	27.7	28.7	32.2	22.8	24.0	92.9	11.0	19.9	44.7
	3	26.0	29.6	29.6	34.3	23.2	25.5	74.1	0.0	26.4	48.6

6月5半旬～7月1半旬までの平均気温は平年より1～2℃程度低く、降水量は多く、日照時間は6月6半旬以外は短く推移した。7月2半旬以降は一転し、平均気温は2～4℃程度高く、降水量は少なく、多照傾向となった。

※九州北部の梅雨明け：7月8日頃（平年より11日早い）

2. 生育状況（調査日：7月16日）

項目 品種 (設置場所)	年 次	草 丈 cm	茎 数 本／㎡	主 稈 出葉数 L	葉 色 SPAD	概 要
コシヒカリ 唐津市厳木 町天川 5/16 移植 標高 550m	本年値	75.8	413	11.7	36.4	・草丈は平年並み ・茎数は平年よりやや多い ・出葉は平年並み ・葉色は平年より淡い
	平年値	75.8	399	11.6	40.3	
	平年比	100	104	+0.1	-3.9	
項目 品種 (設置場所)	年 次	草 丈 cm	茎 数 本／㎡	主 稈 出葉数 L	葉 色 SPAD	概 要
夢しずく 唐津市相知 町伊岐佐 6/12 移植 標高 70m	本年値	48.7	324	9.7	40.7	・草丈は平年より低い ・茎数は平年並み ・出葉は平年より早い ・葉色は平年並み
	平年値	56.9	325	9.0	40.5	
	平年比	86	100	+0.7	+0.2	

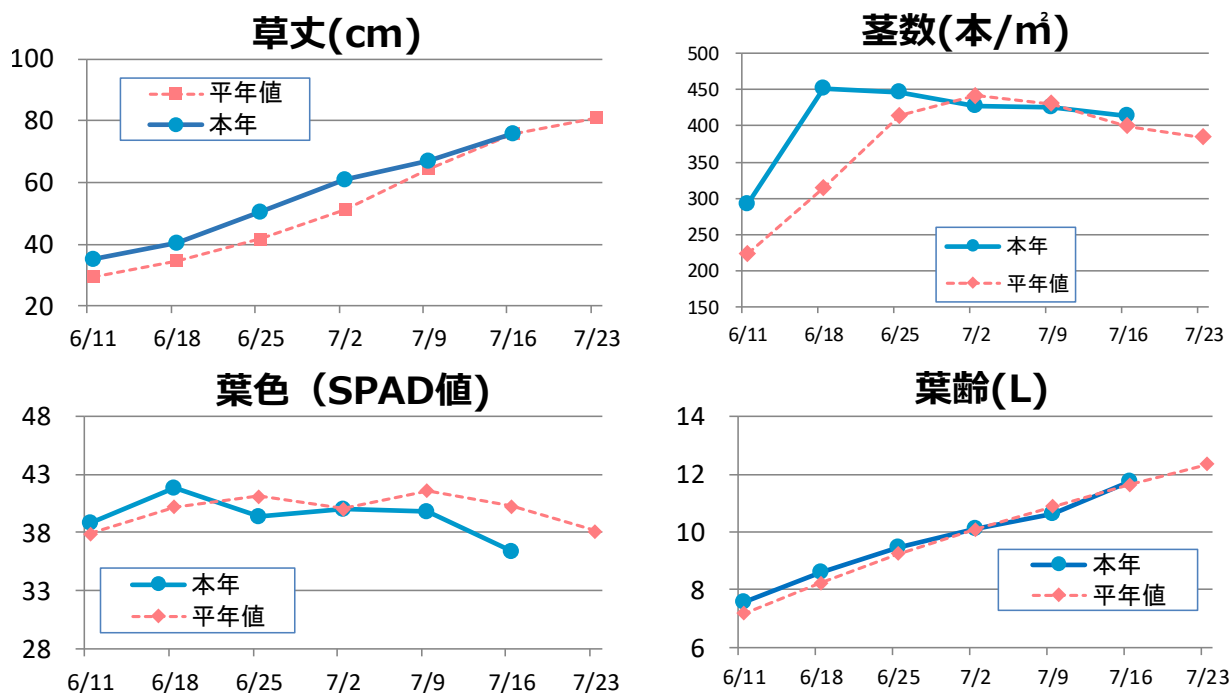
項目 品種 (設置場所)	年次	草丈 cm	茎数 本/㎡	主 稈 出葉数 L	葉色 SPAD	概 要
さがびより 唐津市相知 町相知 6/20 移植 標高 10m	本年値	40.8	472	9.0	46.3	・草丈は平年より低い ・茎数は平年より多い ・出葉は平年よりやや遅い ・葉色は平年より濃い
	平年値	46.0	346	9.5	43.5	
	平年比	89	136	-0.5	+2.8	

※平年比の【草丈】【茎数】は平年比、【主稈出葉数】【葉色】は平年差で表記している。

(1) 山間早植え

- ・作況ほの「コシヒカリ」は穂ばらみ期となっており、減数分裂期を迎えている。7月末～8月初旬頃の出穂が見込まれる。梅雨明け後、高温多照傾向で推移していることから葉色が褪めている。
- ・山間「コシヒカリ」及び「にじのきらめき」において、7月上旬にいもち病の発生を確認したものの、上位葉への進展は認めていない。

◎「コシヒカリ」作況ほの生育グラフ(厳木町天川)

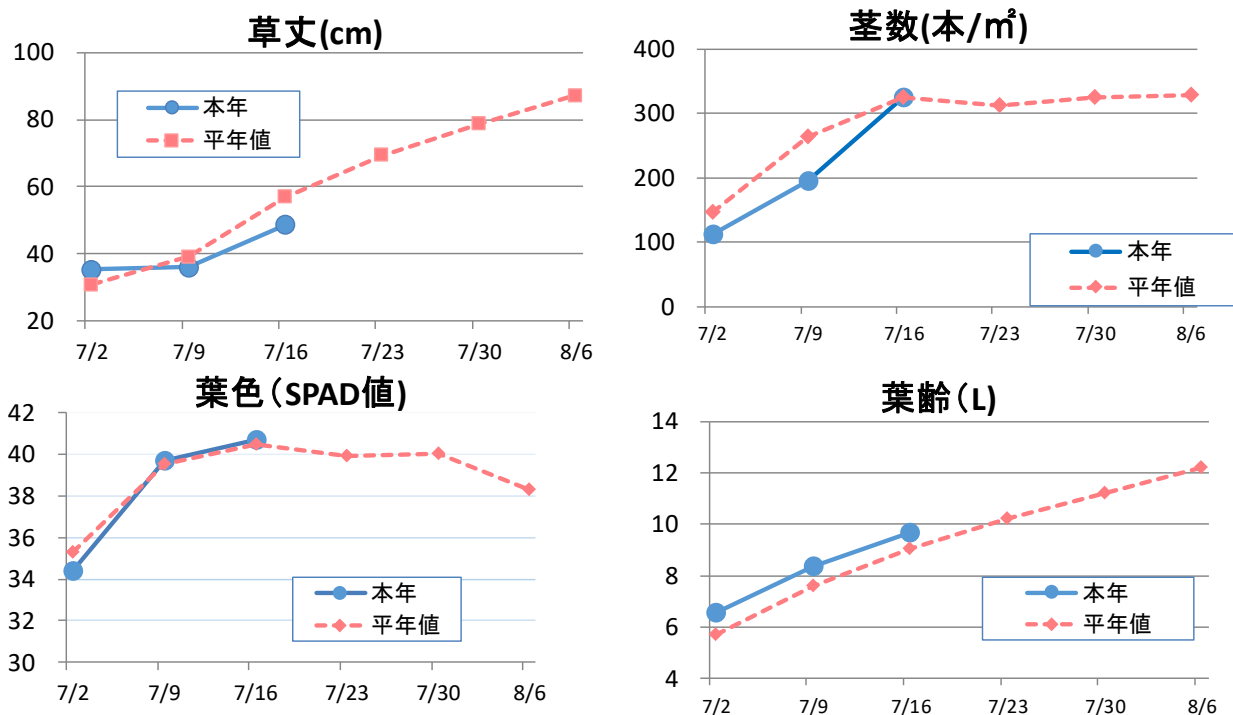


(2) 普通期水稻

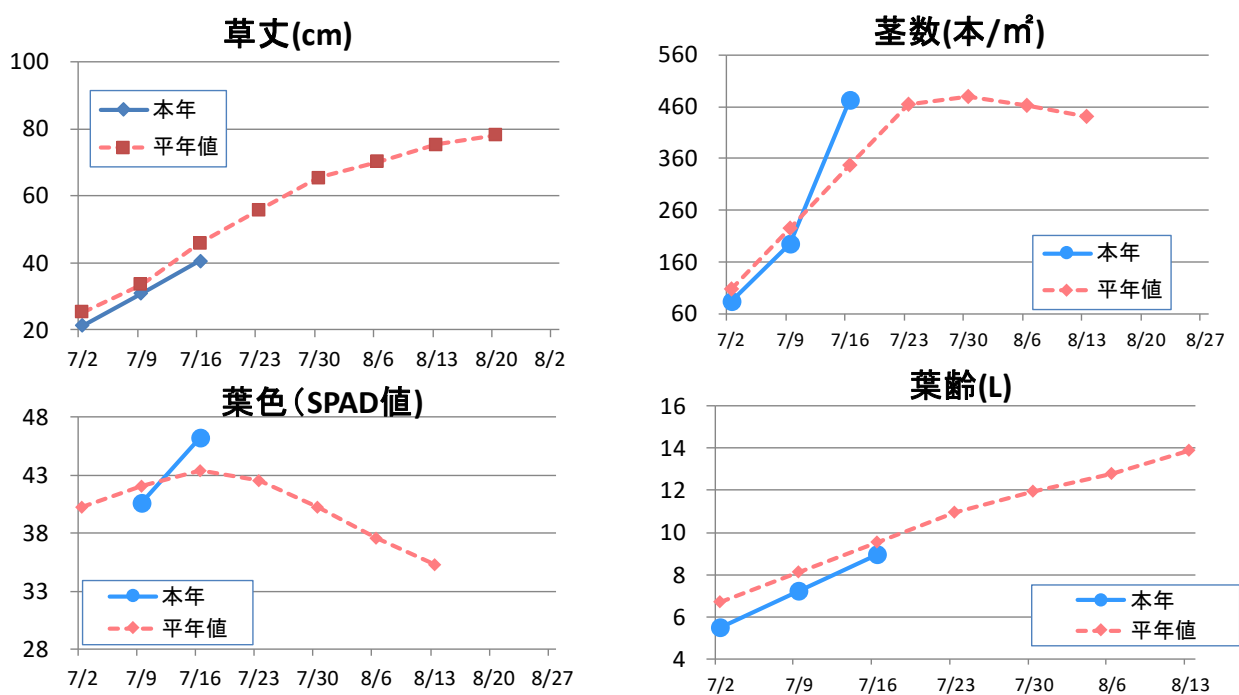
- ・7月2半旬以降、好天に恵まれたことから、作況ほの「夢しずく」及び「さがびより」両品種ともに生育は回復傾向にあり、茎数も平年並み～多くなった。
- ・「夢しずく」は、まもなく幼穂形成始期、「さがびより」は最高分げつ期を迎える。
- ・梅雨明け後、気温が高く推移していることから、スクミリングガイの活動が活発となり6月20日頃以降に移植し、生育が停滞した圃場で、本貝による被害が増加している。

- ・「夢しずく」で見られていたもち病については、天候が回復したことで病斑の進展は確認されていない。
- ・トビイロウンカについては、現時点で作況圃場では幼虫のふ化は確認していないが、今後の発生には注意が必要である。
- ・7月10日以降、全品種においてコブノメイガによる食害が増加している。

◎「夢しずく」作況ほの生育グラフ(厳木町天川)



◎「さがびより」作況ほの生育グラフ(厳木町天川)



3. 今後の管理

(1) 山間早植え

①栽培管理

《水管理》

- ・幼穂形成期から穂揃期はイネが最も水を求める時期であるため、間断灌水での管理とし、出穂期前後1週間は湛水管理とする。土壌表面が白く乾く白乾状態は避ける。
- ・断続的な降雨により十分な中干しができなかった圃場では、間断灌水の落水期間を長めにとるなどして田面を固める。

【間断灌水】

- ・入水後、自然落水させ、右の写真のように足跡に水が残る状態になったら入水する水管理を繰り返す水管理方法である。



間断灌水

《肥培管理》

- ・5月中旬移植の圃場は穂肥の施用時期は過ぎている。
- ・移植が遅く、穂肥の時期を迎えている圃場では穂肥診断基準（稲作情報第1号参照）に基づき穂肥を施用する。
- ・今年も夏場の高温が予想されており、登熟期の栄養不足を防ぐためにも葉色が褪めている圃場では積極的に穂肥を施用する。

《表1 コシヒカリ（一般栽培）の穂肥診断基準》

	葉 色		施用時期		穂肥施用量
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	窒素成分 kg/10a
生育不足	2.5 以下	28>	25~23 日	1~2mm	2.0
標 準	2.5-3.0	31	18~16	1.5~2.5cm	2.0
濃 い	3.0-3.5	34	15	2.5cm	1.0
過 剰	3.5 以上	35<	施 用 し な い		

※第3葉身長（出穂前 22~18 日ごろの最上展開葉）が 42cm 以上、または第5節間長が 3cm 以上の場合、倒伏が懸念されるので穂肥は施用しない。

《表2 コシヒカリ（特別栽培）の穂肥診断基準》

	群落葉色	穂 肥 時 期		穂肥施肥量
		出穂前	幼穂長	10a 当たり
なたねペレット	3.5 以下	25~23 日	1~2mm	20kg
	3.5 より濃い	—	—	施用しない

※施用資材・量等は、特裁の有無・地域により異なるので、地域の暦参照

(2) 普通期水稻

①栽培管理

《水管理》

- ・有効茎数が十分に確保できていない圃場では、引き続き浅水管理で分けつ促進に努める。
- ・有効茎数20～25本/株が確保できた圃場は、順次中干しへ移行する。
- ・中干しは田面に軽く亀裂が入る程度とし、手が入るほどの亀裂ができるような過度な中干しは避ける。

【中干しの目的】

- ① 無効茎の発生防止や下位節間の伸張防止
- ② 窒素制限による生育量の適正化
- ③ 有害物質の除去及び土壌酸化による根の健全化
- ④ 地耐力を高め倒伏を防ぐ



適度な中干し

《肥培管理》

- ・6月上旬に移植された「夢しずく」では、まもなく幼穂形成始期を迎える。
- ・以下の穂肥診断基準に基づき、施用時期を逸しないよう穂肥を適切に施用する。

1)「夢しずく」の穂肥診断基準(県基準)

幼穂形成 始期草丈	葉色		施用時期		施用量
	群落	SPAD	出穂前	幼穂長	窒素成分 kg/10a
73cm 以下	3.0 以下	34 以下	20-22	1mm	3.0
	3.0-3.5	34-38	18-20	2mm	3.0
	3.5-3.8	38-39	15-14	10-15mm	1.5-2.0
	3.8 以上	40 以上	施用の場合止葉抽出終了まで		1.0 以下
73-79cm	3.0-3.5	34-38	18-20	2mm	1.5-2.0
	3.5-3.8	38-39	15-14	10-15mm	1.0
	3.8 以上	40 以上	施用しない		0.0
80cm 以上	原則として施用しない				0.0

草丈は幼穂形成始期(1mm)を基点に前後1日当たり1cm増減する。

(3) 病虫害・雑草管理(山間早植・平坦普通期共通)

《雑草関係》

- ・「ホタルイ、オモダカ、ノビエ類」の後発生が多い圃場では、散布時期を逸しないように中後期除草剤を処理する。ただし、特別栽培の圃場では農薬成分カウント数に注意する。



【花茎伸長したホタルイ(草丈 20cm)】



【バサグラン粒剤散布後】

《病虫害関係》

① スクミリングガイ(通称:ジャンボタニシ)

- ・今年、6月20日以降の普通期水稻で生育が停滞していたことに加え、7月2半旬以降の天候回復により本貝の活動が活発となり食害が増加している。
- ・本貝の被害が増加している圃場では、農薬等による防除や浅水管理による被害防止に努める。

・メタアルデヒド粒剤は、残効が散布後数日と短いため、毎年被害が多い圃場では1回目の薬剤を散布してから約1週間後に2回目の防除を行うことで被害軽減効果が高くなる。

- ・特別栽培を行っている圃場では農薬成分カウント数に限りがあるため、農薬成分カウントに影響しないリン酸第2鉄資材などを用いて防除を行う。

② トビイロウンカ

- ・佐賀県農業技術防除センターの調査では、以下の表のとおり6月上旬から複数回にわたって、断続的な飛来が確認されている(表1)。
- ・今後は、本種の増殖に好適な気象条件が予想されることから、圃場での発生状況に注意するとともに、発生予測図(山間・早植え水稻:図1、普通期水稻:図2)を参考に適期防除に努める。
- ・防除は、効果の最も高い幼虫ふ化揃期に実施するとともに、圃場は湛水状態とし、薬剤は株元まで届くように留意する。

③コブノメイガ

- ・7月10日頃から、本虫による食害が増加している圃場が散見される。
- ・発生予察情報を参考として、圃場での発蛾最盛期（成虫発生盛期）を確認し、その1週間後に防除を行う。なお、大規模経営など発蛾最盛期の把握が困難な場合はカルタップ粒剤などを用いた防除を検討する。

表1 ウンカ類・コブノメイガのトラップ捕獲状況(2026年)

月	日	トビロウンカ				セジロウンカ				コブノメイガ								
		佐賀県		長崎県		佐賀県		長崎県		佐賀県								長崎県
		佐賀市 ネット トラップ	嬉野市 ライト トラップ	諫早市 ライト トラップ	諫早市 ネット トラップ	佐賀市 ネット トラップ	嬉野市 ライト トラップ	諫早市 ライト トラップ	諫早市 ネット トラップ	佐賀市 フェロモン トラップA	佐賀市 フェロモン トラップB	神埼市 粘着トラッ プ(20W蛍 光灯)	伊万里市 フェロモン トラップ	白石町 フェロモン トラップ	武雄市 粘着トラッ プ(20W蛍 光灯)	諫早市 フェロモン トラップ		
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0			0	0		
	2日	0	欠測	0	0	0	欠測	0	0								0	0
	3日	欠測	1	0	0	欠測	0	0	0								0	
	4日	0	0	0	0	0	17	0	1								0	
	5日	0	0	0	0	0	0	0	1								0	
	6日	0	1	0	0	0	1	1	0								0	
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0								0	
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0								0	
	9日	0	0	0	0	0	0	0	0								0	
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0								0	
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
	12日	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
	15日	0	0	0	0	0	1	0	0	0								
	16日	0	0	0	0	0	1	0	0	0								
	17日	0	1	0	0	0	1	0	0	0								
	18日	0	4	0	0	0	4	0	0	0								
	19日	0	0	0	0	0	1	0	1	0		0			5	6		
20日	0	8	0	0	0	4	0	0	0								44	
21日	0	0	0	0	0	0	0	1	0								8	
22日	0	0	0	0	0	1	0	0	0								12	
23日	0	0	0	0	0	2	0	0	0								6	
24日	0	0	0	0	0	29	4	0	0								11	
25日	0	0	0	0	0	47	0	0	0								1	
26日	0	1	0	0	0	106	4	0	0								0	
27日	0	1	0	0	0	11	0	0	0								1	
28日	0	0	0	0	0	4	0	1	0								0	
29日	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0								
30日	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0								
7月	1日	0	12	0	0	0	7	5	2	0	0	0		0	3	0	1	0
	2日	0	11	0	0	0	7		0	0	0							
	3日	0	2		0	0	8		0	0	0							
	4日	0	22		0	0	46		0	0	0							
	5日	1	3		0	2	32		0		0							
	6日	0	99			2	111			0	0							
	7日									0	0							
	8日									1	0							

注1) ウンカ類: 佐賀市のネットトラップは、農業試験研究センターで調査(回収日で集計)。嬉野ライトトラップ(予察灯)は農業技術防除センターで調査。6月2日の嬉野ライトトラップは、装置の不具合により欠測。
 注2) コブノメイガ: 神埼市、白石町、伊万里市、武雄市は防除員が調査。佐賀市のフェロモントラップは農業試験研究センターで調査。
 ※長崎県のデータは、長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室提供。

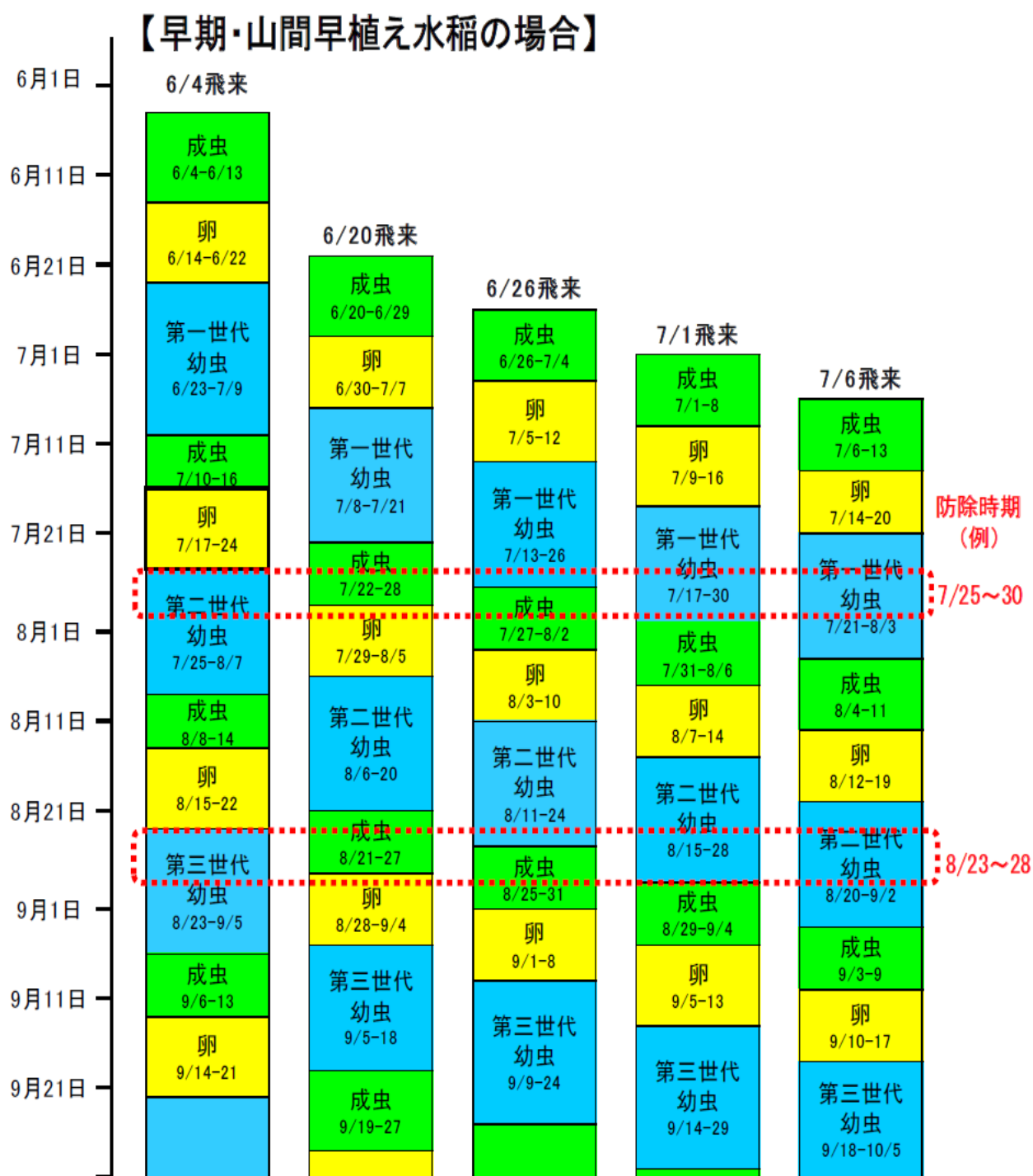


図1 早期・早植え水稻でのトビイロウンカ各世代の発生予測（第1版、2026年7月8日作成）

1. 6月3～6日頃（図では6月4日）、6月17～20日頃（図では6月20日）、6月26～27日頃（図では6月26日）、7月1日～2日頃（図では7月1日）、及び7月4日～6日頃（図では7月6日）の飛来虫を起点とし、トビイロウンカの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（7月8日以降は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 12℃、発育上限温度 28℃、発育停止温度 33℃とした。

2. 赤枠囲みは、発生予測からみた防除時期（例）を示す。

3. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。

4. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

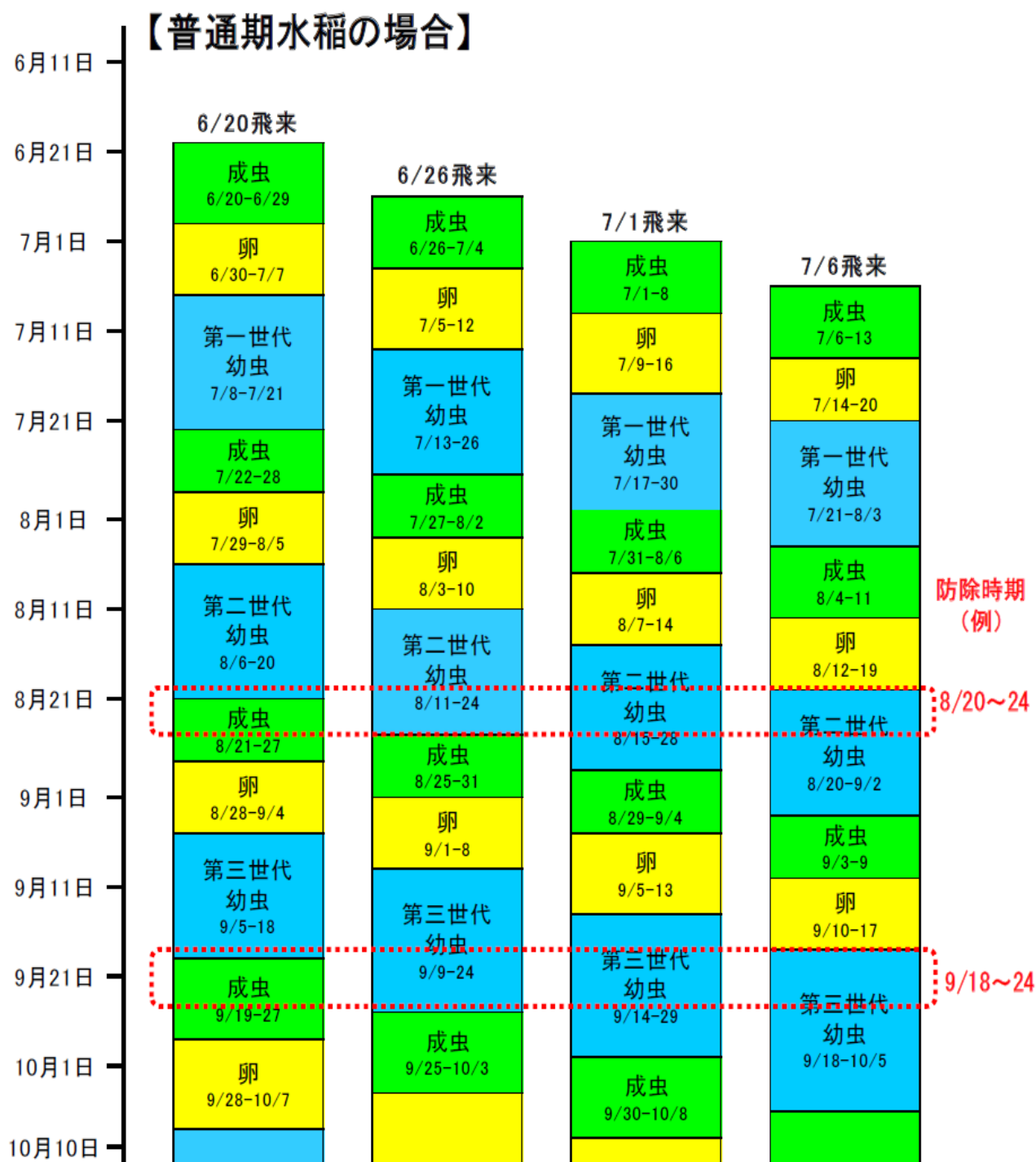


図2 普通期水稻でのトビイロウンカ各世代の発生予測（第1版、2026年7月8日作成）

1. 6月17～20日頃（図では6月20日）、6月26～27日頃（図では6月26日）、7月1日～2日頃（図では7月1日）、及び7月4日～6日頃（図では7月6日）の飛来虫を起点とし、トビイロウンカの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（7月8日以降は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 12℃、発育上限温度 28℃、発育停止温度 33℃とした。
2. 赤枠囲みは、発生予測からみた防除時期（例）を示す。
3. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
4. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

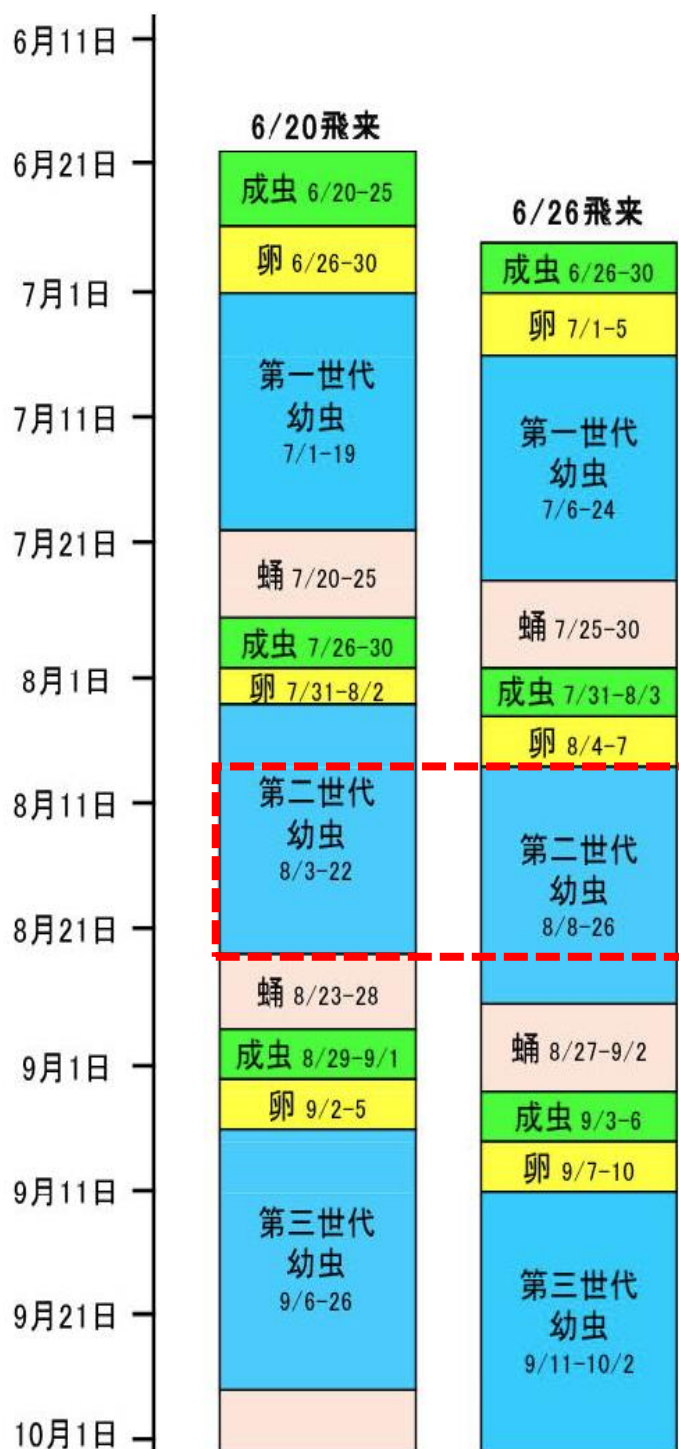


図3 コブノメイガ各世代の発生予測（第1版、2026年7月8日作成）

1. 6月20日頃、6月26日頃の飛来虫を起点とし、コブノメイガの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（7月8日以降は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 13℃、発育上限温度 28.5℃、発育停止温度 33℃とした。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

④いもち病

- ・6月4半旬以降の曇雨天により、管内「コシヒカリ」、
「夢しずく」及び「にじのきらめき」において、いもち病の
発生を確認したが、その後、好天に恵まれ高温多照傾
向で推移したことから、病斑の進展は見られていない。
- ・いもち病の進展型病斑が確認された場合は、農薬成
分カウントや収穫前日数に留意しながら、オリブライト
250G 等で臨機防除を実施する。



いもち病（停止型）

【BLASTAM 情報】

- ・6月23日以降、感染好適条件は出現していない。
- ・今後も本病の発生に注意するとともに、特に盆地や山
あいの圃場など空気が滞留し湿度が高くなり易い圃
場では本病の発生を注意深く観察する。



いもち病（進展型）

BLASTAM情報第3号（葉いもち感染好適条件の出現状況）（2026年7月13日更新）

月	日	佐賀					福岡			長崎	
		唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	前原	太宰府	久留米	松浦	佐世保
6月	1日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2日	●	●	—	●	●	—	—	—	—	●
	3日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	4日	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—
	5日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	6日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	7日	—	—	—	●	—	—	—	●	—	—
	8日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	9日	●	●	—	—	●	●	—	—	●	●
	10日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	11日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	12日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	13日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	14日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	15日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	16日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	17日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	18日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	19日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	20日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	21日	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—
	22日	—	—	—	—	—	—	2	2	—	—
	23日	●	4	—	—	●	●	●	●	●	—
	24日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	25日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	26日	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—
	27日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	28日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	29日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	30日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	?
7月	1日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	3日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	4日	—	—	—	●	—	—	●	—	—	●
	5日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	6日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	7日	—	—	—	—	—	●	3	—	—	—
	8日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	9日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	?
	10日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	11日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

- 1：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満）
2：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が25℃以上）
3：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤期間中の平均気温が15～25℃の範囲外）
4：準好適条件（湿潤時間が湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い）
●：好適条件（湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した）
—：好適条件の出現なし
?：判定不能

⑤紋枯病

- ・高温多湿条件で多発する。
- ・今年は、夏季が高温になる予報であることから、本病の発生に注意が必要である。
- ・本病が多発した場合、稲体の支持力低下により倒伏が助長され、収量品質の低下や収穫作業への支障を招くため圃場の発生状況に応じて適切に防除を実施する。
- ・粒剤の場合は出穂の30～20日前、水和剤及び粉剤の場合は出穂の20～10日前を中心に防除を行う。



紋枯病の病斑



被害株に形成された菌核

⑥カメムシ類

(斑点米カメムシ類)

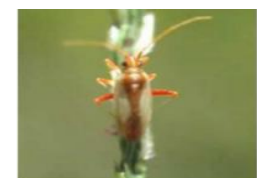
- ・県では、早期水稻を対象に令和8年6月22日に斑点米カメムシに対する注意報を発令した(令和8年6月22日付け佐農技防第281号)。
- ・県農業技術防除センターが県内のイネ科雑草地で行った調査では、斑点米カメムシの発生量が平年よりかなり多く、今後の吸汁被害が懸念される。
- ・畦畔雑草は斑点米カメムシの増殖・飛来源となるため、耕種的防除として出穂10日前までに除草作業を行う。それ以降に除草作業を行うと、畦畔に生息する斑点米カメムシが圃場内に移動し被害が助長される。
- ・斑点米カメムシ類の防除適期は、乳熟期(出穂約10日後)、発生が多い場合は穂揃い期と乳熟期の2回防除を実施し、被害防止に努める。



クモヘリカメムシ



ホソハリカメムシ



アカスジカスミカメ

【佐賀県農業技術防除センターの調査結果(注意報より一部抜粋)】

表1 イネ科雑草における斑点米カメムシ類のすくい取り調査結果(6月後半調査)

	クモヘリ カメムシ	ミナミアオ カメムシ	ホソハリ カメムシ	アカスジ カスミカメ	シラホシ カメムシ類	イネ カメムシ
本年(R8)	72.5	9.2	4.0	46.4	0.5	0.1
平年比	多	多	多	並	並	並
平年	1.7	0.1	1.2	35.3	0.5	0.0
前年(R7)	0.4	0.1	1.7	14.6	0.1	0

注) 表中の数値は、すくい取り調査(捕虫網20回振り)における地点当たりの平均捕獲虫数。
平年値は過去10年(H28～R7)の平均値。

(イネカメムシ)

- ・出穂期にイネカメムシに加害されると不稔粒となり減収となる。
- ・近年、県内においても発生が確認されており、被害の拡大が懸念されている。
- ・特に周辺より出穂が早い、または遅い圃場では飛来が集中し被害が大きくなる可能性があるため、圃場をよく観察し、発生が多い場合は、出穂期の防除を行う。

※穂ぞろい期や乳熟期に防除を行う斑点米カメムシとは防除適期が異なるため注意する。



イネカメムシ

令和8年産 稲作期間気象図

アメダス観測値(唐津)

東松浦農業振興センター

